

和歌山県立

もん びよ かん

# 文書館だより

第59号 令和3年3月



川合小梅が『環海異聞』巻十に描いた<sup>ロシア</sup>魯西亞皇帝夫妻の肖像画  
(その時の皇帝ですので当帝とされています。)

『小梅日記』と  
ドナルド・キーン

## はじめに

幕末から明治にかけて和歌山城下町に川合小梅という女性が住んでいました。この女性は大変な記録魔で、毎日の天気まで独特な方法で克明に記録しています。その日記を見つけて執念で校訂した一人が、小梅の曾孫に当たたる志賀裕春氏です。志賀氏は、それ以外にあった小梅関連資料をまとめて、縁戚関係にある雑賀悦子氏に託したのです。

それらの資料が回りまわって、今当館に寄託されています。

その小梅を作家の山本藤枝さんは、女性史の立場から

縫いものもした。洗濯もした。およそ家庭の女のこなすべきよろずのしごとをこなしながら、そして、「扱々せわし」「大にくたびれる」とこぼしながら、ひまをぬすんで特技だった絵を描き、本を読み、写本をするのである。

と評しています。この、ひまをぬすんで特技だった絵を描き、本を読み、写本をするのである。

という部分に注目する必要があるでしょう。つまり、彼女は一般的な武家の主婦として、やらなければならない仕事をす

べてやりこなす、それをやり終えた後で「ひまをぬすんで」、趣味である絵や写本に取り組んだということを指しているのです。

またさらに、彼女の日記の記述を指して、

ほとんどといていいほど感情をまじえず、あくまでも即物的に、生活を記録する。

ことを目的としているように見える、とも言っています。

一方、日本文学史研究で有名なドナルド・キーンは『小梅日記』に検討を加え、

小梅の文章には、およそ文学的洗練というものが無い。

と痛罵した上で

だから活版印刷で九百頁にもぼると嘆いています。それが東洋文庫版の三冊(嘉永二年〜明治十八年)の長さに対する嘆きなのです。そして、

また小梅の日記は、『蜻蛉日記』この方、女性によって書かれた日記に特有だと私には思われる、一種独特の真実味に貫かれている。とフォローしてもいます。

## 『小梅日記』の性格

ドナルド・キーンは、『続百代の過客』の中で川合小梅の日記について様々な分析を試みています。

ですが、彼女の日記を丁寧に読破するのは、彼にとつては確かに並大抵の苦勞ではなかっただろう、と考えられます。

これだけ長い期間書き続けられると、その日記は様々な性格を持つものになっていきます。例えば、すべての来客や

彼らが持ち込む贈答品の記録的な性格であったり、それらの来客をもてなす、ほとんどに酒を振る舞っていますから、そうした接待をすることによって発生した

金銭の出納簿、つまり家計簿のような性格を持つたりというようなことでもあります。

またこの日記は、夫であり藩校の儒者で後にその督学(学長)となる梅所の学

校外での行動日誌的な性格をも持つことにもなっています。なぜ、そうした性格を持たせることができたのでしょうか。

これは、小梅の側の使命感からではなく、梅所の側からの依頼ではなかったのかと思えるのです。

つまり普通に考えれば、梅所が学校外の自らの行動を、逐一小梅に報告していたということになるでしょう。何故、そんなことをする必要があったのでしょうか。

これだけ詳しく記録させたのは、梅所が学校外でどこに行っていたかという自らの存在証明であり、また逆に、どこに行っていないかという、不在証明をつくらせたかったのだと考えるのが自然ではないでしょうか。これは梅所の備忘

録的性格をも果たしていたのでしよう。後から、いついつの事を確かめようと思つたとして、年月日をうる覚えでも何とか求めるところにたどり着くこともできるでしょう。

ところで、少し考えすぎかもしれないが、小梅も梅所もこの日記が後々誰かに読まれるかもしれないということを意識していたのかもしれない。

## ドナルド・キーンの小梅観

いずれにせよ、ここではドナルド・キーンが川合小梅をどう見ていたか、またどう思っていたのかについて検討を加えてみましょう。

かつて、ドナルド・キーンは小梅が書いた『小梅日記』について様々な批判を展開しています。

ただ、彼が実際に読んだのは先述の東洋文庫版の三冊だけだったのも事実です。

それに、彼は紀州に対しても小梅に対しても、甚だ失礼なことを言っています。それは、

和歌山といえ、文明開化からは忘れられていたような地域。文明開化のなんたるかが、小梅にあまりピンと来ていなくても、無理はなかったのである。……

世の中が急変しつつある時代に、たまたま自分が生まれ合わせたことを、果たして彼女は気づいていたの

だろうか。

という記述なのですが、この表現はどう考えても、和歌山と小梅の存在に対して極めて捻じ曲げた表現だとしかいいようがありません。

とにかく、ここでは彼の小梅に対する見方がどの程度的を射ているのかを、検証してみましよう。

まず、第一に彼は、小梅が

なにか外国で起こったことに興味を  
持ったとは、一言も書いていない。

として彼女を批判し、第二に

外国語から訳された本は、一冊たり  
とも読んでいない。

と言い、第三には

新聞から、長い文章を筆写すること  
があるが、その内容が、外国のこと  
だったためではない。

とも言っています。

しかし、そうでしょうか。

まず、第一の批判から検証を加えてい  
きましょう。

### 第一の批判の検証

確かに、小梅は外国で起こったことに  
興味を持ったとは、一言も書いていま  
せんが、嘉永六年（一八五三）六月廿八日  
の条に

暑気見廻に行。主人。環海異聞の事

云。先日よりの約束ゆへ、岡野平太  
夫殿へ向かへすよし言。

という記述があります。

この記述は、岡野平大夫（この四年前  
に菊の間席を仰せつかつています。家老）  
が川合梅所を通じて、小梅に筆写させる  
ように命じていた『環海異聞』を返却す  
るという意味です。

ということは、小梅はこの時点で既に、  
『環海異聞』を写し取っていたことにな  
ります。

確かにそうなのです。これは東洋文

庫版には出ていませんが、『和歌山県史  
近世史料二』所収の天保八年（一八三七）  
分の裏表紙に

環海異聞、五月十一日昼過方写しか

け、諸用事のいとまにうつせば八月  
四日までてやうやう終わる、しかし

絵の所十ヶ所程残る

という記述があつて、彼女は嘉永六年よ  
り一六年も前の、天保八年の時点で既に

『環海異聞』の絵の部分を除いて、その

ほとんどを写し終わっていたと書いてい  
るのです。

と言うことは、嘉永六年に原本は返し  
たものの、そこから写し取った写本は小

梅の手元に残ったことになるわけです。

これは後述しますが、あれだけの量を  
三か月足らずで、それも自らするべき仕

事の合間をぬって写し取るとは大した早  
さです。

### 『環海異聞』とは

ところで、『環海異聞』という書物が  
どういう性格を持ったものなのかについ

て少し説明しておきましょう。

本書は、仙台の船乗り一六人が寛政五  
年（一七九三）の冬に石巻を出てから、  
途中で逆風にあい、難破・漂流した後、

ロシア船に助けられて結局、日本人とし  
てはじめて世界を一周することになると

いう、破天荒な漂流記です。寛政五年に  
出発してから文化元年（一八〇四）に長

崎へ戻るまでの約一・二年間におよぶ

記録です。ただ、この時長崎まで送り届  
けられたのはわずかに四人だけでした。

これは、仙台藩医であった大槻玄沢が  
藩命をおびて、漂流人達から何度も何度

も事情を聴取して、文化四年（一八〇七）  
に至ってやっと聞き取りを終えて、完

成させることができたものとされていま  
す。

ただ、経緯は不明ながらこの『環海異  
聞』は全国的にかなり多くの写本が流布

していたものですから、それを岡野も何

らかの手段で手に入れて、梅所を通じて  
小梅に筆写させたものでしょう。

元来、『環海異聞』は十六卷八冊の構  
成ですが、当館に寄託されているものは

十二卷仕立てです。その内訳は序巻一冊、  
巻一・二が一冊、巻三・四が一冊、巻七が

一冊、巻八が一冊、巻九・十が一冊、巻  
十一・十二が二冊の合計七冊です。巻五・

六が欠けているのは残念ですが、それで  
も当時の魯西亜皇帝夫婦の肖像が描かれ

ていたり（表紙写真参照）、庶民の生活  
習慣（下段写真）・移動手段・娯楽・動



物の姿、言語などが写し取られていて、  
大いに楽しめる部分があります。

ただ、先にも述べたように、嘉永六年  
六月に返却したものは、岡野が手に入れ

たものでしょうが、小梅の手には、それ  
から写し取ったものが残ったのは確かだ  
でしょう。

### 『海外新話』とは

また、『小梅日記』の嘉永六年十二月  
六日の条には、さらに

海外新話万次郎へかす

という記事が出てきます。梅所は梅本家  
の長男ですが川合家へ養子に出た身で



す。万次郎というのは梅所の実の弟である梅本藤四郎の次男ですから、彼にとつては甥にあたります。なかなか勉強熱心で海外の諸事情にも強い関心を持っていたようです。もちろん『環海異聞』にも目を通してあります。

ところで、『海外新話』とは、丹後田辺藩士であった嶺田楓江が阿片戦争の惨状を知って、そのことを多くの人々に報らせようと、嘉永二年(一八四九)に五巻五冊本に仕立てて、イギリスのアジア侵略の様子を極めて詳しく説明した書であり、当時の世界図や中国の略図も収められています。

この『海外新話』について小梅は何のためらいもなくその書名を挙げ、いかにも当然のように万次郎に貸しています。普通であればほとんど知らない書物については、ある分野の本とか何とかという本という表現でごまかすことが一般的だと考えられます。ところが、小梅は何のためらいもなく『海外新話』という書名を直説に記しています。

これはとりもなおさず、小梅が既にそれに目を通し、さらに写し取ったという可能性を示唆しているものと考えられます。

それは

小梅終日写し物

という記述が随所に見かけられるからであります。

したがって、この時点で小梅には海外

の情報や生活の実態に関する豊富な知識があったものと考えられます。

以上によって小梅に対する第一の批判は当たらないことが明らかにできたと考えます。

ところで、同年十二月十三日の条に、万次郎は五冊ある『海外新話』の内一冊だけしか返しに来なかったという事実が書かれています。

という事は万次郎もこれらを全冊写し取るつもりだったのでしょうか。

## 第二の批判の検証

文久四年(一八六四)四月十四日の条に

昼前順輔、異国より渡りし物種廿六七品くれる

とあります。この中に書物が含まれていたら不明ですが、その可能性は十分に考えられるでしょう。

この順輔とは、大番格奥詰儒者であった岸順輔を指していますから、梅所とは同僚関係になるわけです。

同年五月五日の条に、夕方から主人梅所が、鈴木芳右衛門方に行っている間に

宿にて長崎・おらんだ杯の本よむ。

という記述が現れます。宿とは自宅のことををさしていますから、前後の文脈から考えても、ここでは、小梅が「長崎・おらんだ杯の本」を読んだものと解釈するのが自然だと考えられます。

また、同年十月九日の条に

松下へ丁ちゃんと先達てかり置し河村の本六さつかへす。女子の嶋の事、異国へ流されし筋、かへりし筋、長崎、同くら談、おらんだ本。

とあります。松下は御書院組頭松下彦右衛門を指すと思われませんが、その松下を通して河村から借りていた六冊の書物の内、女子の嶋の事が何を指しているのかは未詳ですが、「異国へ流されし筋」「かへりし筋」「長崎」「同くら談」は『環海異聞』の事を指しているのは事実でしょう。

ただ、おらんだ本は小梅が読んでいたおらんだ本を指していると思われませんが、従って、第二の批判も当たっていないものと考えるのが妥当でしょう。

## 第三の批判の検証

新聞については、慶応三年(二八六七)一月二六日の条に

新聞書昨日来り、今日撰述所へ為持遣す。

とあり、同年五月十五日の条に

野口順輔新聞二冊持参。江戸近藤よりよこす。新聞壹冊三百文の由。英国教師ベリー先生編。正月分、二月分。

とあります。この慶応三年の新聞というのは、『日本新聞発達史』の第二章第五節に「外人経営新聞の再興」として、次のようにあります。すなわち、

慶応三年には再び外人経営の新聞が

現れた、第一は「萬国新聞紙」である、この新聞は海外雑報の外に英国の文明を紹介し或は洋行案内、イソップ物語等を掲載している、且つ第二号よりは横浜新聞なる欄を設け、貿易其他の記事を掲載してゐる、編者は英国領事館附の牧師にしてケムブリッジ大学の卒業生バックウオーズ・ベリーである、

というものです。これはまさに慶応三年五月十五日の記述に対応するものです。そして、この新聞は一月に初集を、同年十二月迄に第九集まで発行し、『日本新聞発達史』では第十五集(明治二年二月)まで発行されていたということが確認されているようです。これらも翻訳されているものですから、第三の批判も的外れということになります。

結局、三つの批判ともドナルド・キーンが誤解が生んだ産物ということになります。

参考文献

山本藤枝「川合小梅」(人物日本の女性史六巻所収集英社 昭和五十二年)  
ドナルド・キーン「小梅日記」(『続百代の過客』所収昭和六十三年朝日新聞社)  
小野秀雄『日本新聞発達史』(大正十三年 大阪毎日・東京日日新聞社)

(須山高明)

ある移民のアメリカ生活譚(一)  
〜甚四郎、海を渡る〜

『和歌山県立文書館だより』五〇号で、

目録化作業中の岩崎家文書の、アメリカからの年賀状について紹介がありました。岩崎家と、アメリカへ渡った紀三井寺の人たちとの間に交流があったことを示す貴重な史料ですが、同家文書には移民からの手紙も多く残されています。手紙の内容からは、現地での生活や労働状況などをうかがい知ることが出来ます。

実は、紀三井寺の岩崎家からも甚四郎という人物が移民として渡米しており、その手紙が残っています。今回は手紙の内容から、彼がどのようにしてアメリカへ渡ったのかをみていきましょう。

■渡米のきっかけは先人の成功譚？

甚四郎は中場家の人でしたが、富三郎の姉おみねと結婚し、婿養子として岩崎家へ入りました。その後年月が経ち、甚四郎は明治二十五年(一八九二)三月にアメリカへ旅立ちます。このとき四五歳、子供もいました。

甚四郎が渡米を思い立ったきっかけは何だったのでしょうか。その一つと考えられるのが、明治二十五年一月に、西亀之助がアメリカから紀三井寺に帰着していたことです。

以前の号でもふれたとおり、亀之助は岩崎家との交流もあり、亀之助の在米生活のことは紀三井寺でも当然広く知られたことでしょう。甚四郎もアメリカでの

生活や仕事について、亀之助から直接聞いたのではないのでしょうか。それが渡米のきっかけとなったのかもしれない。

■紀三井寺から横浜へ

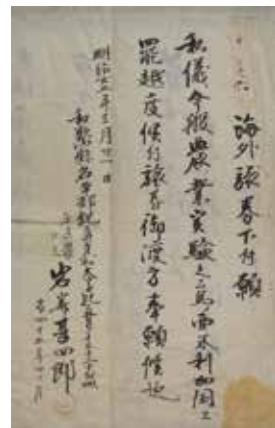


写真1 「海外旅券下付願」

移民として海外に渡るには旅券が必要です。甚四郎もまず旅券発行の申請を行いました。このときの申請の目的は「農業実験」、つまり農作業の従事のため、ということでした(写真1)。

さて、明治二十五年三月二十五日に申請認可を受けた甚四郎は、アメリカへ渡

るためさっそく横浜へ向かいます。甚四郎の手紙によれば、道程は、同月二十六日には大阪梅田から神戸まで汽車に乗り、そこから東京品川行き船に乗りました。品川に到着したのは二十八日の午後で、そのち横浜行きの汽車に乗り込み当日中に到着します。そして三十一日発の桑港(サンフランシスコ)行きの船に乗り日本を立出た、というものでした(写真2)。

甚四郎が渡米に要した実際の費用そのものは判明しませんが、甚四郎の後年の手紙に「是迄は米國各二本行船賃は五十一円」、つまりアメリカ発日本行きの場合の船賃は五十一円と記されており、また明治二十三年(一八九〇)頃の渡米

費用がおおよそ四五円から六〇円ほどだったそうですから、同等の費用がかかったと思われま。加えて横浜までの交通費、アメリカでの当面の諸費用などが必要でしたから、実際にはそれ以上の金額が必要でしたでしょう。

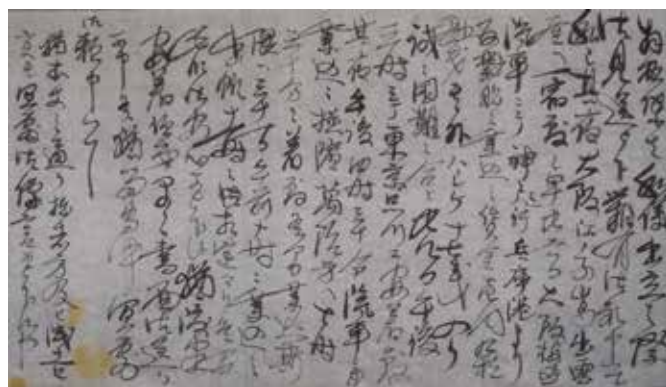


写真2 甚四郎から富三郎への手紙 (3月29日付)

■アメリカへは到着したものの

三月三十一日に横浜を出発した船は、四月十六日に桑港へ到着しました。

しかしながら、到着してすぐに甚四郎が上陸することは叶いませんでした。

同じ船に天然痘罹病者がいたため「衛生予防ノ為」、「消毒セネバナラヌ事柄」により、近くの「アンジェルアイランド」すなわちエンジェルアイランドという島で二週間の待機となりました(地図)。しばしの待機ののち、ようやく甚四郎は桑港の地に降り立つことができたのです。

ちなみに明治三十一年(一八九八)にアメリカへ渡った人物も、桑港到着時に天然痘罹病者が同船していたために、同島で二週間待機した旨を、手紙にて岩崎家へ伝えていきます。この島はアメリカへの移民を審査、検査する場所であり、後年には移民局が置かれた地でした。



地図 エンジェルアイランド

さて、桑港上陸後、甚四郎は浜替喜助という人物の宅で二日ほど寄宿し、そののち「早速田舎間」へ赴いたところで、桑港到着ののち、紀三井寺に残してきた妻子への言付けとを手紙にしたためて岩崎富三郎へと送りました。

以後、甚四郎は農作業に従事しつつ、紀三井寺の妻子への仕送りとともにアメリカ現地での日々の暮らしの様子などを手紙に書き記して、富三郎へ送り続けます。

今回は、アメリカでの甚四郎の生活についてみていきたいと思います。(西山史朗)

参考文献

- 『和歌山県移民史』(和歌山県、一九五七)
- 『和歌山県史 近現代一』(和歌山県、一九八九)



パネル・ケース展示  
**ぼっかんさん** (貝塚寺内町領主) の紀北旅行  
 令和二年度貝塚市郷土資料展示室企画展から

大阪府貝塚市の浄土真宗貝塚御坊願泉寺とその住職を代々つとめるト半家は、親しみを込めて「ぼっかんさん」とも呼ばれます。江戸時代、お坊さんであるト半家は、貝塚寺内町の地頭(領主)でもありました。

文政七年(一八二四)九月下旬、ト半家第十代当主了真は、妻や六人の子(後の第十一代了諦となる太郎丸ら「若君様」二人・姫様「四人」、家来らを引き連れ、六泊七日にわたり総勢四五名で紀伊国北部の名所を旅行しました。

九月二十三日、貝塚を出発した一行は、犬鳴山(泉佐野市)から和泉国と紀伊国の国境を越え、その夜は粉河(現紀の川市)で一泊します。翌二十四日は岩出(現岩出市)、二十五日は紀三井寺門前、二十六日和歌山城下、二十七日は加太(以上、現和歌山市)でそれぞれ宿泊しました。二十八日には再び和泉国に戻って尾崎(現阪南市)でもう一泊し、翌二十九日の夜に貝塚へ帰りました。



『紀の路御遊覧日記』

- 9月23日の行程
- 9月24日の行程
- 9月25日の行程
- 9月26日の行程
- 9月27日の行程
- 9月28日の行程
- 9月29日の行程



基図：平凡社『和歌山県の地名【日本歴史地名体系31】』特別附録 和歌山県全図【縮製二十万分一図複製版】

ト半家一行の行程図 (貝塚市教育委員会作成)

この六泊七日の紀北旅行は、粉河寺・紀三井寺・和歌浦・鷲森御坊・加太浦・大川浦の報恩講寺など、各地の寺社を参詣し名勝を遊覧しながらの観光旅行で、

七日間の移動距離は約一〇〇kmに及びました(図参照)。文書館蔵『紀の路御遊覧日記』は、この旅行に随行した家臣が了真の命を受けて書き留めた旅行記です。一行が巡った名所の様子や、各所で詠んだ俳句や漢詩、宿屋や茶屋の名、食事のメニュー等も詳細に記録されています。

令和二年秋、貝塚市郷土資料展示室企画展「江戸時代の人びとの旅行記」古文書から見た様々な観光名所」では、『紀の路御遊覧日記』が大きく採り上げられ、「ぼっかんさんの紀北旅行」として、約二〇〇年前のト半家一行の観光旅行の足跡を辿りながら、紀北地域の名所が多数紹介されました。

文書館では、貝塚市教育委員会の御協力をいただき、令和三年一月六日から四月七日まで、右企画展の内容をパネル・ケース展示で再現し、また『紀の路御遊覧日記』原本を展示して、ぼっかんさんの旅を追体験しました。



令和二年度 「和歌山県歴史資料アーカイブ」 公開資料の紹介

前号では、昨年度「和歌山県歴史資料アーカイブ」で収集した資料の紹介を行いました。本号では、前号で紹介しきれなかった資料を紹介します。

安楽川村文書Ⅰ・Ⅱ 三三四点、五、五五五コマ

安楽川村文書Ⅰ・Ⅱは、平成三十年(二〇一八)十二月のサイト開設時から目録のみ公開していましたが、令和二年七月十四日から画像を追加公開しました。安楽川村文書は、明治大正期の那賀郡安楽川村(現紀の川市)と、その大字である元地区の役場に関する文書群です。左の写真は、「明治十二・十三年度元村々会議帳簿受渡目録」です(安楽川村文書Ⅰ以下「Ⅰ」と略。資料番号12)。



写真 「明治十二・十三年度元村々会議帳簿受渡目録」(安楽川村文書Ⅰ 資料番号12) \*公開している画像は白黒です。

旧議長の片山善四郎から、新議長へ業務を引き継ぐにあたって作成されました。この目録から元村々会議では、

- ・村会議接総体書
- ・同 日誌
- ・同 説明書
- ・同 決議進達書控
- ・同 戸数等級附
- ・同 議員出席表

といった公文書のあったことがわかります。

このうち「明治十二年度」村会議接総体(Ⅰ18)、「明治十二年度元村々会議日誌」(Ⅰ13)、「那賀郡元村々会議案総体説明書」(Ⅰ14)、「明治十二年度元村戸数等級賦課法」(Ⅰ16)、「元村々会議員出席表」(Ⅰ24)が伝わっており、目録通りに文書の引継が行われたことが判明します。

和歌山県報 明治三十七・三十八年 二五八点、一、七三三コマ 県民の友 昭和二十六年・二十七年 七二点、二四二コマ

「和歌山県報」と「県民の友」は、画像だけでなく、件名目録を併せて公開しています。

ちょうど七〇年前の「県民の友」昭和二十六年三月一日発行分によると、当時天然痘が流行しはじめていたため、県内一斉種痘、つまりワクチンの接種が行われることが予告されています。

「県報」や「県民の友」からは、当時の世相を読み取ることができます。

令和二年度 歴史講座

第1回 令和2年8月22日(土) 日高町小浦浄土院の焼火地蔵と漁師

講師…県教育庁文化遺産課 松原瑞枝技師

講師…藤隆宏主査

第2回 令和2年8月29日(土) 川上<sup>おしろ</sup>不白と紀州徳川家の茶の湯

講師…砂川佳子文書専門員

第3回 令和2年9月5日(土) 陸奥宗光の政治スタイル―外交史料展の展示資料を中心に―

講師…平良聡弘研究員

令和二年度の文書館歴史講座は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、参加を定員四五名の事前申込制とし、マスクの着用や手指消毒を行うなど、感染対策を行いながら開催しました。全三回で一〇四名が出席しました。

第一回「日高町小浦浄土院の焼火地蔵と漁師」では、島根県隠岐島の焼火権現信仰が江戸時代の廻船航路の発達により小浦にもたらされたことや、大阪府岸和田の漁師の日高地方への出漁について、地域に伝えられた塩崎家文書(当館所蔵)から解説しました。

参加者からは、「今、小浦、津久野は人口も少なく、ひっそりとした場所です。その昔には、大勢の漁師・漁船がひしめきあったと思うと、考えられない賑わいだったのだなと驚きました。」などの感想をいただきました。

第二回「川上不白と紀州徳川家の茶の湯」では、新宮水野家の家臣で江戸千家を創始した茶人川上不白の生誕三〇〇年を記念して、自筆とされる『不白筆記』などの史料から紀州徳川家の茶の湯について紹介しました。

「不白筆記の内容について様々なエピソードを学ぶ機会となり、大変興味深く拝聴しました。江戸時代の茶の湯に触れ、現在の茶道にも受け継がれている内容も多々あることに気が付きました。」「今後このような紀州の埋もれた伝統等に光をあてる講座を続けてください。」などの感想をいただきました。

第三回「陸奥宗光の政治スタイル」では、令和元年度に実施した企画展「外交史料と近代日本のあゆみ」で展示した史料に基づいて、明治時代に外務大臣として不平等条約の改正などに活躍した陸奥の政治スタイルを明らかにしました。



「和歌山市出身の陸奥宗光のことをもっと知りたいという願望がずっとあった。今日のお話からその当時の活躍の様子がよくわかった。獄中生活や留学という苦労や活躍、その人生を経て、世界の中の日本を作り上げていった尊い人生がわかります。」などの感想をいただきました。



『古文書徹底解説 紀州の歴史第八集』の刊行

大変御好評いただいている『古文書徹底解説 紀州の歴史』シリーズは、文書館の古文書講座で取り上げた古文書の写真に、詳細な解説・釈文(解説)・読み下し文・文意例(現代語訳)を加えた本です。古文書の用語や語法はもちろん、原文の用語間違いや文章力の巧拙も解説し、文意を徹底的に解釈しています。また、そこから、江戸時代の紀州の社会構造、制度や運用の実態も明らかにします。令和二年度発行の第八集は、「御巢鶴(おんすづ) 捉り鯛(とらひ)」と題し、文書館寄託「高橋家文書」から、和歌山市北部木本村に居住する根来者(ねうら)の高橋家(当初は垣内家)が、紀州藩主(なつか)が鷹狩(たかご)を行う鷹場の獲物を増やすために烏や鷺(さぎ)などを鉄砲で駆除する役目を勤めたり、あるいは根来者の名義を相続する過程などで作成した古文書を取り上げます。根来者は根来寺僧兵が起源で、徳川家康が羽柴秀吉と戦った小牧・長久手の戦いで家康側に加勢したこと、江戸時代に至り幕府や紀州藩の下級役人となったものです。通常は農業をし、緊急の際にだけ出動を求められる役儀でしたが、のちに権利(株)として売買されるようになり、実際は売買でありながら、藩の手前、相続として願出た一連の古文書を読み進めます。『古文書徹底解説 紀州の歴史 第八集』は、残部がある限り文書館閲覧室でお配りします。また、文書館ウェブサイトからダウンロードできます。

紀要第二十三号の刊行

●松本泰明「近世・近代移行期の大蔵書 和歌山県立図書館所蔵「濱口梧陵文庫」」 濱口梧陵の旧蔵書「濱口梧陵文庫」の内容や蔵書形成の背景などを紹介し、梧陵の思想形成過程を考察します。濱口梧陵生誕二〇〇年記念県立図書館・文書館合同展示「濱口梧陵と梧陵文庫」展(本紙前号参照)の成果報告です。●玉置将人「県立耐久高校所蔵「耐久梧陵文庫」の保存と活用」 近年整理が進み、文書館「和歌山県歴史資料アーカイブ」サイトでの公開に至った県立耐久高校所蔵「耐久梧陵文庫」について、資料整理の経緯と蔵書の内容を紹介し、また、同文庫活用の取組を事例として、学校所蔵資料の活用について考えます。●藤隆宏「湯浅村における安政地震津波への対応と教訓の継承」 和歌山県指定史跡「大地震津波心得の記」碑や古文書から、有田郡湯浅村(現有田郡湯浅町湯浅)における安政地震津波の発生状況・被害の実態と併せて、救援・復興施策と教訓を継承する活動が組織的に行われたことを明らかにします。●砂川佳子・西山史朗「史料翻刻 県立串本古座高校所蔵中根文庫より『新宮武鑑』」 県立串本古座高校所蔵中根文庫(和歌山県歴史資料アーカイブ)で公開のうち「新宮武鑑」を翻刻しています。また、中根文庫について解説するとともに、文書館資料などの比較から、「新宮武鑑」の史的価値を確認します。

文書館の利用案内

利用方法

◆閲覧室受付にある目録等が必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。



◆閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。

◆複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

開館時間

- ◆火曜日～金曜日 午前10時～午後6時
- ◆土・日曜日・祝日及び振替休日 午前10時～午後5時

休館日

- ◆月曜日(祝日又は振替休日と重なるときは、その後の平日)
- ◆年末年始 12月29日～1月3日
- ◆館内整理日 1月4日
- (月曜日のときは、5日)
- ・2月～12月第2木曜日
- (祝日と重なるときは、その翌日)
- ・特別整理期間 10日間(年一回)

交通のご案内

- ◆JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅からバスで約20分
- ◆和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分



ホームページアドレス <https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>  
和歌山県歴史資料アーカイブアドレス <https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/archive/index.html>

和歌山県立文書館だより 第59号

令和3年3月31日 発行  
編集・発行 和歌山県立文書館  
〒644-1005  
和歌山市西高松一丁目一三八  
きのくに志学館二階  
電話 〇七三-四三六-九五四〇  
FAX 〇七三-四三六-九五四一  
印刷 有限会社阪口印刷所